
ボクとロリコンのお兄ちゃん

CENTER

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ボクとロリコンのお兄ちゃん

【Nコード】

N1356M

【作者名】

CENTER

【あらすじ】

「ごめん、俺はロリコンなんだ」

ある年のバレンタインデー。

勇気を出してお兄ちゃんに告白した小学生のボクは、そうやってふられてしまった。

そしてボクは

(前書き)

ふと思いつき、何となく書き上げた超短編。
正直よくわからないお話です。

「ごめん、俺はロリコンなんだ」

二月十四日。バレンタインデー。

お菓子会社の陰謀なんて、素直じゃない子たちが言うけれど、好きな人がいる女の子の背中を押してくれるステキな日。

精一杯の勇気を出して言ったボクの告白（ボク、お兄ちゃんが好きです）を聞いたお兄ちゃんは、食べていたチョコレートが物凄く苦かったような顔でそう言った。

ロリコンって何だろう、って、その当時のボクにはわからなかったけど、ごめんって言われたから振られたことはわかった。

いつものゲームセンターの安っぽい電子音が、急に音量を増した気がする。

悲しくて、泣き出してしまったボクを、困った顔をしたお兄ちゃんは、優しく抱きしめてくれた。

お兄ちゃんは、ガラス細工かお姫様でも抱いてるみたいに、慎重に慎重を重ねた手つきで髪を撫でてくれて、

そんなに優しいお兄ちゃんに好きだって言ってもらえなかったボクは、お兄ちゃんの匂いに包まれたままわんわんと泣いた。

お兄ちゃんとボクが出会ったのは、一世代前のゲームしか入っていない、人気のないゲームセンターだった。

夏の太陽も沈んでしまう頃。友達の家で遊んだ帰り道で。

黄ばんでしまったプラスチックケースに囲まれたクレインゲームの中に積まれているぬいぐるみを魔法みたいに取り出していた人。

それが、お兄ちゃんだった。

お兄ちゃんはお父さんがお仕事に行くときみたいなスーツを着ている、カッコイイ大人だった。

ボクの知識では、そんな人はゲームセンターみたいな場所にはいないはずで。

なのに、お兄ちゃんは、そこが自分の縄張りみたいに、慣れた感じで景品の山を作っていた。

ボクは、飽きもしないで、ずっとお兄ちゃんを眺めていて。

しばらくして、お兄ちゃんがボクに気がついた。

目が合ったとき、ボクは、怒られる！ っと思った。

具体的に何とも知れないヒドイコトされるんじゃないかと体を硬

くするボクに、お兄ちゃんは一つのぬいぐるみを差し出した。

「えーと、いる？」

全く突然に、好きだと思った。

正確に言えばちょっと違う。

この人を好きになるだろうという、確信めいた予感。

ボクは一度頷いて、お兄ちゃんが差し出してくれたぬいぐるみを受け取った。

二頭身のハムスターみたいなぬいぐるみのみはとつくに過ぎ去っていたけど、ボクは最高に可愛いと思った。

そうしてボクは、お兄ちゃんがいるゲームセンターに通うようになった。

お兄ちゃんはゲームの達人だった。

欲しいと言ったぬいぐるみは必ず取ってくれるし、格闘ゲームはパーフェクトの嵐。

シューティングゲームをすれば画面を埋め尽くす弾を華麗にかわし、リズムゲームをするときは音楽家になった。

ときどき、ゲームセンターの隅っこのベンチで勉強を教えてもらったりもして。

気がつけば、ボクの予感ほ、ほんとうに変わっていた。

「ロリコンって何？」

気が済むまで泣いて、ボクはお兄ちゃんにそう聞いた。

お兄ちゃんはポケットからハンカチを取り出して、ボクの顔を拭きながら、

「小さい女の子が好きな人のことかな」

「ボク、小さいよ？」

なのに好きになってくれないのと尋ねれば、お兄ちゃんは困ったように笑った。

そして、俺が好きなのはねと言って、出てきた名前は存在しない女の子のものだった。

ちょっと前にテレビでやってたアニメの主人公^{ヒロイン}。

普通の小学生だったのに、いつの間にか事件に巻き込まれて、魔法で変身して解決する。

テレビの中の人だから、当然可愛くて、泣き虫だけど絶対に諦めない女の子。

「普通じゃないんだよな……」

目を細めて、独り言みたいに呟いたお兄ちゃん。

その横顔は、お兄ちゃんにお仕事を聞いたときの顔に似ていた。

お兄ちゃんは、言いたくなさそうだったけど、ボクがしつこく聞いていると、観念して教えてくれた。

「市役所で働いてるんだよ」

確かボクは、凄い、って言ったと思う。

ここは田舎町だけど、市役所で働いている人は何となく偉い人のような気がした。

そしたら、お兄ちゃんは、今みたいな顔をして、スーツの裾を引っ張った。

「真面目に生きてますって、擬態してるんだよ」

「ぎたい？」

「ふりをしていますってこと」

本当はゲームとかが好きだけど、それはちゃんとした大人じゃないから、そういうふりをしてるんだって。

難しいことはわからないけど、何となくわかったことがある。

お兄ちゃんは、普通がよくわかってて、自分がそこからズレていることが嫌なんだ。

そして、多分そのズレが、ボクの心を惹きつけたんだって。

だから、ボクはひそかに決意した。

ボクはずっと、お兄ちゃんのことを好きでいようって。

それからも、ボクは変わらずお兄ちゃんに会いに行った。

最初は少しぎくしゃくしたけど、ボクはお兄ちゃんのことを好きだっけ言うのを我慢していたから、いつの間にか元通りになれた。

そして、ボクたちは友達として時間を過ごし

ボクは一八歳わたしになった。

高校の卒業式のその日。私はかつてないほどにハイテンションだった。

別れを惜しむクラスメイトたちが涙を流している横でニッコニコ笑っている私は、さぞ浮いていただろう。

名前を呼ばれて、卒業証書を受け取って、長い長いお祝いの言葉

をもらっつ。

教室に戻ったら、いつも怒ったような顔してる先生が、男泣きに泣きながら話をしてくれた。

時間よ早く過ぎろ！

最期のホームルームが終わって、私は教室を飛び出す。

友達の誘いも、カメラ片手に手招きするお母さんもぶっちぎり。

走る。

走る！

走る！！

ドキドキ。高鳴る胸。

息が上がって、苦しくなって。

期待とか不安とか、色んなキモチを抱えて。

叫ぶ。

「お兄ちゃんっ」

校門のそばで、黒いスーツをきっちり着こなしたお兄ちゃんが片手を上げた。

いるのは知っていた。

卒業証書を貰うステージの上から、確かめた。

お父さんやお母さんにこっそり混ぜあって、保護者席にいたお兄ちゃん。

私が卒業式に来てってお願いしたから来てくれた。

これって、期待していいんだよね！

出てくるのが早すぎて、ほとんど人がいない。

門出なんて言っても、みんな、昨日までの今を惜しんでる。

でも、私は違う。

私は、先に進むの！

通い慣れた道を駆け抜けて、力強く、踏み切る。

全速力で飛びついた私を、お兄ちゃんはちょっと驚いた声を出して受け止めてくれた。

ぐりぐりって、額をお兄ちゃんの胸に押し付けて、呼吸を整える。

大好きなお兄ちゃんの匂いがする。

こんな風にスキンシップをするのは久しぶりで、お兄ちゃんが戸惑ってるのがわかる。

それでも、お兄ちゃんは優しく手の平を私の頭にのっけて、「卒業、おめでとう」って言うってくれた。

私は、息を整えて、一步下がる。

頭一個高いお兄ちゃんの顔を見上げて、

「お兄ちゃん。私は、お兄ちゃんが好きです」

何年かぶりに、お兄ちゃんに告白した。

お兄ちゃんは、ちょっとびっくりした顔をして、それから困ったみたいに笑う。

「ごめん、俺はロリコンなんだ」

返って来た言葉は、あのとときと同じだった。

でも、私はもう、あのとときのボクとは違うから。

背も伸びたし、おっぱいもお尻も大きくなった。

月に一度はあそこから血も出るし、もう、大人のカラダ。

幼女好きロリコンには逆効果？ んなことない。

お兄ちゃんは、本気で自分がロリコンだと思ってて。

でも、お兄ちゃんが言うロリコンは、社会不適合者って意味。

だから、幼いボクの告白も拒んでくれた。

それでもボクとお兄ちゃんはいいい友達で、それはボクが私になっても変わらなかった。

でも、そういう目で見られることは、ボクが私になるにつれて多くなっていった。

クラスの男子たちがたまーに送ってくる視線。

エロ本の話をしてゲラゲラ笑つてるときとは違う、無駄に真剣で、どこか後ろめたさを含んでる視線。

私になんとかひどく低俗でいやらしい生き物になったみたいに感じる、生臭いそれを、お兄ちゃんからも感じたことがある。

男子どもの視線なんて、キモチワルイだけだけど、お兄ちゃんに視られてるときは、お腹の奥の方がキュンとなったりして。

それでも、私何も知らないよなんて、可愛い子ぶる私はどうしようもなくずるいオンナノコだった。

私は今日、オンナノコを卒業します！

そんな風に決意を新たにして、私は、長年のお兄ちゃんの勘違いを正してあげることにした。

「お兄ちゃんは、ロリコンじゃなくて、ただのオタクだよ？」

って。

何で今日まで黙ってたかって？

そんなの、そうやって勘違いしてくれたら、私以外の女の子と付き合ったりしないでしょ？

お兄ちゃんは、見たこともないくらいびっくりした顔で固まって。

しばらくしてから、ゆっくりと手を伸ばして、私をそっと抱きしめてくれた。

「俺、オタクなんだけど、いいの？」

耳元で囁かれた言葉に、うん、と頷いて。

私は、お兄ちゃんの首に腕を巻きつけてキスをした。

「大好きだよ、お兄ちゃん！」

(後書き)

長編の合間に息抜きで書いた話で、公開するつもりはなかったんですが、

送りつけた友人が、そろって「よくわからんけど、なんかイイ」と感想をくれたので、公開することにしました。

ある意味タイトル詐欺ですね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1356m/>

ボクとロリコンのお兄ちゃん

2010年10月8日14時35分発行